

「産声が鳴る」

牧史也

登場人物

久津輪 柊司	(18)	(22)	(26)	大学生・不動産会社員
庄内 里夏	(15)			学生
庄内 里夏	(32)	(36)	(40)	不動産会社員
久津輪 みく	(2)			久津輪の娘
安達 雅人	(23)	(27)		久津輪の同僚
局 恭子	(40)	(44)		久津輪の上司
鈴木 かりん	(20)	(24)	(28)	久津輪の元彼女
吉木	(18)	(22)	(26)	久津輪の同級生
淀見	(19)	(23)	(27)	久津輪の同級生
笹本 ミオ	(20)			見習いコック
男性社員				
女子社員 <sup>A</sup>				
女子社員 <sup>B</sup>				
ファミレス店員				
里夏の母				

○田舎道（夜）

街灯がまばらで辺りは薄暗い。蝸の声。  
セーラー服の少女が荒い息遣いで走っている。走りながらチラチラと振り返る顔は、怯えている。  
少女の背中に向かって手が伸びる。

○カレー屋・外

晴れ空に蝉の声。

久津輪柘司（22）と安達雅人（23）  
がスーツ姿で店から出てくる。

手にはお弁当が入ったビニール袋を持って  
っている。

安達「久津輪さあ、あの人のどこがいいわけ？」

久津輪「うーん、どこだろうね」

安達「けっこう歳いってるだろ？」

久津輪「今年36」

安達「なんで把握してるんだよ。なににせよだ。庄内さんはやめといた方がいいって」

久津輪「どうして？この前は、突っ走れって  
言ってたのに」

安達「いや、だってあの人……」

雨が一粒落ち、コンクリートに染み  
を作っすぐに消える。

○カモシカ不動産・中

2組の客が、物件の資料を見ながら  
対面で話している。

庄内里夏（36）は、その奥でパソコ  
ン作業をしている。

その手を止めて、バッグから巾着を取  
り出し立ち上がる。

○同・パントリー

紙コップを持った2人の女性が話をし  
ている。

女子社員△「事務の庄内さんの噂、聞いた？」

女子社員□「噂？何の？」

周りを確認する女子社員△。

女子社員Bの耳に手を当てる。

驚いて紙コップを落とす女子社員B。

床にコーヒーが飛び散り、足にかかる。

女子社員B「熱っ！」

女子社員A「ちよつと！なにしてんのバカ」

パントリー外側の壁にもたれて、下を

向ている里夏。手にはインスタントの

味噌汁を持っている。

ゆっくりと壁から離れ、エレベーター

の方へ歩く里夏。

○同・エントランス・中

雑居ビルのエントランスに久津輪と安

達が進んで入ってくる。

2人はエレベーター前で立ち止まる。

久津輪「そんなの嘘に決まってる」

安達「まあ、噂だけどさ。先輩たちが言って

たつて話」

携帯電話が鳴り、応答する安達。

安達「はい安達です。え！あれ、僕が担当で

したっけ！すみません！すぐ行きます！」

電話を切る安達。

ビニール袋を久津輪に差し出す。

安達「内見の予約入ってたんだった。飯食う時間がなくなったから、それプレゼント。

まあ、頑張れよ！」

非常階段を駆け上がっていく安達。

エレベーターが到着し、乗り込む久津輪。コを押す。

○同・屋上

陰ができた地べたに里夏が膝を抱えて座っている。側には、口が紐で縛られた巾着が置いてある。

○同・階段

久津輪がビニール袋を2つ持って階段をのぼっている。ドアノブに手をかけ、ドア開ける。

○大学・講義室

ドアが開くと、広い講義室にたくさん  
の生徒たちが座っている。

久津輪（18）は、窓際の後方に向か  
い着席する。

チャイムが鳴り、教授が入ってくる。

鈴木かりん（20）が走って講義室に  
入ってきて、久津輪の隣に座る。

かりんは、バッグの中を何度も探った  
あと、何も取り出さずに机に突っ伏す。

久津輪は参考書をスッと2人の間に移  
動させる。それに気づいたかりんは、

久津輪の横顔を見つめる。

かりんは、ノートの端に

「ありがとうございます」と書いて、

2人の間にノートを移動させる。

その文字を見た久津輪は、目にかかっ  
た前髪を整える。

× × ×

チャイムが鳴る。

久津輪のノートにはびっしりと数式が書かれている。

筆記用具を片付ける生徒たち。久津輪のスマホに通知が来る。

淀見「今日も家いつてるわ」。と書かれている。溜息をつく久津輪。

おじぎをするかりんに気づかない。

#### ○久津輪の部屋

ドアが開くと笑い声が響く。

淀見（19）はゲームをしていて、

吉木（18）漫画を読んでいる。

淀見「柊司おかえり」

吉木「うーっす」

久津輪「……」

久津輪は散らかった部屋を見渡して、ある物を見つけて目を見開く。

吉木の側に空になったプリンノ器。

久津輪「（小声で）僕のプリン……」

笑っている吉木と淀見。



久津輪はドアを勢いよく閉めて外へ飛び出す。

吉木「あれ、どっかいつちやった」

吉木と淀見は不思議そうに顔を見合わせる。

○商店街

叫びながら走っている久津輪。

膝に手をついて立ち止まり、大きく乱れた息を整える。

身体を起こして見上げると、カモシカ不動産の看板がある。

○カモシカ不動産池袋支店・店内

久津輪が物件の資料を見ながら座っている。飲み物が入ったコップが置かれる。久津輪が見上げると、里夏（32）がいる。

里夏「申し訳ございません。ただいま担当の者が全員出払っております」

久津輪「あ、全然大丈夫です。突然来てしまったので」

里夏「15分ほどで戻ると思っていますので、少々お待ちください」

デスクに戻る里夏。沈黙。

店内には2人しかいない。

久津輪はコップのお茶を飲み干す。

里夏のデスクの上には巾着が置かれている。

久津輪「あの、お昼どきにすみません。

もし、ごはんまだだったら、食べてもらっても大丈夫ですんで」

驚く里夏。カバンに巾着をしまう。

里夏の耳が少し赤くなる。

里夏「いえ、大丈夫です。お飲み物、お持ちしますね」

空になったコップを見る久津輪。

里夏がお茶の入った新しいコップを持ってってくる。

里夏「どこか気になる物件など既に決まっ

いらつしやいますか？」

久津輪「え、いや、全然。ただあの、距離を置きたくて」

里夏「距離、ですか？」

久津輪「はい。大学の近くに住んでいるんですけど、それほど仲良くない友達の溜まり場にされていて……。

やめてほしいって言ったら、友達いなくなりそうで、言えなくて。

だから、逃げの引っ越しを検討中です」

2人とも黙り込む。

里夏「いいんじゃないでしょうか」

久津輪「え？」

里夏「お客さまは逃げの引っ越しと申されましたが、より良い未来へ、向かう引っ越しでもあると思います」

久津輪「より良い未来へ向かう引っ越し……」

里夏「あと、差し出がましく恐縮ですが、友達の定義を改めてみるのもいいかもしれません。

私は、一緒にいて心地よくない方と、無理に一緒にいる必要はないかと思えます」

驚いた表情の久津輪。

頬に、一筋の涙が流れる。

玄関のドアが開く音。

男性社員「戻りましたー！」

おじぎして踵を返す里夏。

久津輪はじっとその背中を見つめる。

○カモシカ不動産本社ビル・外観

高層ビル。エントランスにカモシカ不

動産入社式会場と記入された看板。

スーツを来た若者たちが続々とビルに

入っていく。久津輪も晴天を見上げた

あと、なかに入る。

その後方には安達が歩いている。

○カモシカ不動産池袋支店・店内（夜）

久津輪と安達が、歓迎会と書かれたホ

ワイトボードの前に立ってる。

それを見つめる社員たち。里夏もいる。

安達「本日から池袋支店に配属になりました

安達雅人です！早く一人前になれるように

頑張りますので、ご指導ご鞭撻のほど、

よろしくお願い致します」

久津輪「久津輪柗司です。精一杯頑張り……」

挨拶をしながら、久津輪は里夏のを

見つける。久津輪は口が開いたまま棒

立ち。安達が肘で久津輪を小突く。

安達「おい！」

久津輪「あ、よろしくお願いします」

拍手する社員たち。飲み物を配り始め

る。里夏そつとその場を立ち去る。

久津輪は里夏の方を見つめている。

○同・エントランス・外（夜）

街灯に桜が照らされている。

風が吹き、辺りに桜の花びらが舞う。

その光景を見上げながら歩いている里

夏。エントランスから久津輪が走って

出てきて、里夏の背中を見つける。

久津輪「あ、あの、庄内里夏さん！」

驚いて振り返る里夏。

久津輪「いやその、えっと……」

里夏は不思議そうに久津輪を見る。

久津輪「僕と結婚してください！」

里夏は一瞬目を見開き、すぐに真顔に戻る。

久津輪の方をじっと見つめる里夏。

里夏「……罰ゲームですか？」

久津輪「え？」

里夏「新人の方でも、そういうのはきちんと断るべきではないでしょうか」

里夏は久津輪に背中を向けて歩き始める。久津輪は里夏の背中を見ている。

○マンション・里夏の部屋・玄関（夜）

暗い玄関に里夏が入ってくる。

ゆっくりとお腹をさする。

○カモシカ不動産池袋支店・屋上

久津輪と安達が地べたに座り込んで、  
お弁当を食べている。

久津輪「安達ってさ、かっこいいよね」

むせる安達。ペットボトルの水を飲む。

安達「すまん！俺は女性が好きだ」

久津輪「それは、僕もだけど」

安達「なに？」

久津輪「安達ってモテるでしょ？」

安達「まあ、モテるね。どちらかというと」

久津輪「好きな人に好きになってもらうのつ  
て、どうしたらいいのかなって」

安達「あー、それでいうと俺は、自分から人  
を好きになったことないんだよね」

久津輪「けど、彼女はいたんでしょ？」

安達「向こうから俺のことを好きになってく  
れて。嫌じゃないから付き合うことが多い。  
なんかさ、人に対して熱くなることがない  
んだ。久津輪はその点、一生懸命だよな」

久津輪「それは、褒められてる？」

安達「いや、羨ましいなって。俺、苦勞したことないから、人生が淡泊なのよ」

久津輪「いま世界中の全イケてない男たちが、安達に殺意を覚えたよ。人生、血で染まるよ」

安達「久津輪、好きな人でももいるの？」

久津輪「好きな人っていうか」

安達「っていうか？」

久津輪「きつと自分にとって相当大切な人」

安達「その人に気持ちは伝えたのか？」

久津輪「それが、テンパっちゃって」

久津輪は溜息をついて、空を仰ぐ。

久津輪「プロポーズしてしまった」

安達「え？」

久津輪「結婚しましょうって。庄内さんに」

安達「は？庄内さん？事務の？」

久津輪「そう」

大声で笑い出す安達。腹を抱えて笑う。

安達「いやー、ごめん！一生懸命どころじゃなかった！猪突猛進だ」



久津輪「やっぱり変だよね……罰ゲームかって言われちゃったし」

安達「そりゃそうだ。唐突すぎだって。ちやんと一回謝って、話した方がいいぞ」

久津輪「だよね。そうする」

安達「けど、久津輪。お前のその真っ直ぐさは、きっと届くと思う。突っ走れ。」

さて、そろそろ戻ろうぜ！局さんに怒られる」

安達は立ち上がり、お尻をはらう。

○同・店内（夕）

社員が働いている。局恭子（40）がデスクチェアをぐるりと回し、スラリと手を挙げる。

恭子「安達くん、久津輪くん。ちよつと」

安達「はい！」

久津輪「はい」

恭子「君たちさ、物件書類のまとめ方が雑。

これはお客さまにも見せるものでしょ？

もつと丁寧……」

少し離れたところで女子社員2人が

コソコソと話している。

女子社員▶「はじまった。お局様の有り難い

お言葉」

女子社員☐「とくに若い男が好物ですからね

」

女子社員▶「わざわざ本社からお戻りになつたのも、現場イビリのためですう」

安達と久津輪は恭子にペコペコと頭を下げている。

○同・パントリー（夕）

窓の外がオレンジ色に染まっている。

里夏が水筒に水を汲んでいる。

久津輪がパントリーに入ってくる。

久津輪「あの、庄内さん！」

突然声をかけられ驚く里夏。

里夏「おつかれさまです」

久津輪「おつかれさまです。その、先日は唐突にすみませんでした」

水筒の蓋を締め、久津輪を見つめる。

里夏「その話を仕事の昼休憩中に、急にされるのも困ります。気にしていませんし」

久津輪「すみません」

頭を深く下げる久津輪。

久津輪「お詫びにというわけではありませんが、一緒に食事をしていただくことは可能でしょうか」

里夏「可能じゃないです」

久津輪「え、即答……。では、何か飲み物を奢らせてください」

里夏「結構です。失礼します」

早足でパントリーから出ていく里夏。

久津輪「安達……。本当に突っ走っていいのか？」

久津輪は頭を抱える。

○同・廊下（夕）

お腹に手を当てている里夏。

○同・店内

店内には久津輪一人だけ。パソコンで作業していると、エントランスから笹本ミオ（20）が、キョロキョロと見渡しながら入ってくる。

久津輪「いらっしやいませ。ご予約のお客さまでしょうか」

ミオ「予約してへんのですけど、いけます？」

久津輪「えーっと……」

周りを見渡す久津輪。

他に社員はいない。

久津輪「はい。私でよろしければ」

ミオ「なんやその客を不安にする返事」

久津輪「すみません。どうぞおかけください。

こちらの書類に記入お願いします」

久津輪がテーブル席に案内し、ミオは大きなリュックを隣の席に置いて座る。書類を書きはじめる。

名前の欄に「笹本ミオ」と書き込む。

久津輪「お飲み物、何がよろしいでしょうか」

ミオ「何があるんです？」

久津輪「お水かお茶か」

ミオ「お茶の種類は？」

久津輪「ほうじ茶か麦茶か緑茶」

ミオ「お水」

久津輪「かしこまりました。（小声で）何茶  
だったらよかったんだろう」

ミオ「（大きめの声で）紅茶や！」

久津輪「し、失礼しました」

ミオ「ほんま失礼やで」

テーブルに水を置いて、座る久津輪。

久津輪「本日はお引越しのご予定で？」

ミオ「それ以外に来ることある？」

久津輪「世間話をされに来るご年配の方が」

ミオ「同じようにみえる？」

ゆっくりと首をかしげ、ミオを見つめ

る久津輪。

久津輪「見えませんでした」

ミオ「そんなに尺必要やった？！

まあ、ええや。引越したいんです。

青山に出やすくて、落ち着きのある静かな  
場所で、家賃は抑えめ、バストイレ別、  
独立洗面、日当たり良好。これでお願  
いします」

久津輪「えっと、学生さんですか？」

ミオ「学生ちゃいます。見習いの……」

久津輪「見習い？」

ミオ「今はまだ、見習いのコック！」

久津輪「コックさんなんですね」

ミオ「それはええから。物件探して」

久津輪「わかりました。今のお住いはどの辺  
りですか？」

ミオ「京都」

久津輪「京都？大阪じゃなくて？」

ミオ「どういう意味や」

久津輪「あ、いやいや、ちよつと、あの」

ミオ「圧が強いつて？よう喋るつて？まった  
く。どこにいつても、そんなどうでもええ  
こと言われるなあ」

久津輪「……」

ミオ「人をカテゴリに当てはめて、そこからあぶれる奴を異端とする。それって差別やろ……。どこに、私が馴染める場所があるんよ」

テーブルの下で拳をグツと握り、俯く  
ミオ。久津輪はその姿を見つめる。

里夏≪「より良い未来へ、向かう引越してもあると思います」

久津輪「より良い未来へ向かう引越し……。あの、笹本さん、見つけましょう。あなたのための物件！」

顔を上げるミオ。

ミオ「なに、急に」

× × ×

テーブルに物件の資料が散らかっている。ミオは天井を仰ぐ。

ミオ「内見する気にもならん」

久津輪「やはり、どこか妥協しないと……」

ミオ「嫌や！これから上京してくる家に妥協しとつたら、それだけでモチベ下がるやろ」

久津輪「でも」

ミオ「わかった！明日、また来るから探しといて。じゃ！」

ミオは立ち上がり、荷物を持って立ち去る。

戻ってきた安達・恭子とすれ違う。

安達は頭を抱えてテーブルに突っ伏す

久津輪を見つける。

安達「久津輪、一人で担当してたんですかね」

恭子「あら、初めてのひとり立ちかしら」

安達「うまく立てなかったみたいですけど」

久津輪はテーブルの上で伸びている。

○同・店内（夜）

時計が20時を回る。

オフィスには、安達と久津輪、恭子がいる。

恭子「さて、あなたたち、もう遅いからそろ

そろ帰りなさい」

安達「はい」



久津輪「僕はもう少し、キリのいいところまでやって帰ります」

恭子「なに、そんなにパツパツなの？

先輩に早めに相談するなりしなさいよ」

前髪を整える久津輪。

久津輪「ありがとうございます。この物件の準備ができたなら、絶対あのお客さまに喜んでいただけると思うので、がんばります」

目を細めて久津輪を見る恭子。

恭子「そう、あんまり無理しちゃだめよ。

じゃあ安達、飲みに行くわよ！」

安達「ええ！」

恭子「なによ。嫌ならいいけど」

安達「いえ、ご一緒させていただきます！」

恭子「久津輪くんも早めに終わったらいらっしやい」

久津輪「わかりました。善処します」

パソコンを入力したり、資料を見たりしている久津輪。

安達はその背中をじっと見つめたあと、

さっさと出ていく恭子のあとを追う。  
里夏のデスクの上には巾着が置かれて  
いる。

○里夏の部屋・リビング（夜）

カバンを開けている里夏。

何度かカバンを探っている。

里夏「お弁当箱忘れてきちゃった……明日休  
みなのに」

時計を見る里夏。20時になる。

○居酒屋・中（夜）

安達と恭子が話している。

恭子のビールジョッキは空。

恭子「久津輪くんってどうして不動産営業し  
ようと思ったのかしら。あの子、理系で、  
しかも数学を学んでたっていうじゃない」

安達「詳しくは聞いてないですが、この仕事  
は人を幸せにできる仕事だって。それを僕  
は確信してるって言ってました」

恭子「まだ入社間もないのに？」

恭子は首をかしげる。

安達「はい。あと尊敬している人がいるって」

恭子「もしかして、私？」

安達「（小声で）それはないかと」

恭子「おい」

安達「あいつ、大学で確率を勉強してて、何にでも確率を求められるらしいんですけど、確率を求めたくない出会いだっただんですって。

久津輪は全く器用じゃないけど、真っ直ぐでいいやつなんですよね……。

僕は文系だけど、そんな人間らしい一面、持ってないから羨ましいです」

恭子「安達さ、あんた頭いいけどバカね」

安達「へ？」

恭子「あなた今、久津輪のこと、しっかりと考えてるでしょ。人のことをちゃんと思っているってこと。もはや、くさいわ。人間くさい」

安達は顔が赤くなる。

安達の持っているジョッキグラスのビールは減っていない。

恭子「私もね、この仕事が好きなのよ。お客さまの新しい生活が始まる瞬間に立ち会える営業の仕事が」

安達は顔を上げて恭子を見る。

恭子「一度、本社の役職をやった時期があったけど、やっぱり営業がやりたくて戻ってきた。私も安達と同じで、淡白に、効率を大事にしてたけど、人が未来を想像して笑う顔が、好きになつてたの。ダサい？」

安達「いえ、かっこいいです」

恭子「（笑いながら）よろしい！では、おかわり！」

ジョッキを掲げる上げる恭子。

○カモシカ不動産・オフィス（夜）

時計が21時半を回る。

時計を見る久津輪。

ドアが開く音がして、振り返ると里夏

がいる。驚く久津輪。

久津輪「え、庄内さん！」

里夏「え、あ、はい。おつかれさまです」

久津輪「どうされたんですか。こんな時間に」

里夏「（恥ずかしそうに）お弁当箱、忘れてしまつて。私あした休日なので、それで」

里夏はデスクの方に向かい、巾着を

取つてカバンにしまう。

里夏「お忙しいんですか」

久津輪「え、あ、いや僕、要領が悪くて。今、初めて一人でお客さまの担当をしてるんです。でも、希望の物件がなかなか空いていないんですよね。

京都から上京される方で、交通の便利さは担保したいけれど、家賃抑えて落ち着いたところに住みたいって希望なんです」

デスクに突っ伏す久津輪。その姿を見ている里夏。

顔をバツと上げる久津輪。

久津輪「すみません！庄内さんにこんな話してしまつて！遅い時間なのに！」

里夏「……和泉多摩川とか」

久津輪「え？」

里夏「私も京都から上京していて、初めて住んだ街なんです。和泉多摩川。

小田急線が地下鉄に乗り入れてて、家賃もそれほど高くはなかったと思います」

パソコンで調べ始める久津輪。

久津輪「本当だ。23区内ばかりで探してた。よかつた！これで明日また提案できます！」

久津輪は嬉しそうな顔で背筋を伸ばす。

里夏「明日、水曜日だからお休みですよ」

久津輪「え、えー！」

また、デスクに突っ伏す久津輪。

すぐにバツと立ち上がる。

久津輪「あの庄内さん、明日、おひまですか」

里夏「え」

久津輪「現地視察！付き合っていただけませんか」

里夏「えっと」

久津輪「お客さまのため！です」

里夏「……わかりました」

久津輪はてデスクの下で小さくガッツ  
ポーズする。

○和泉多摩川駅・改札外

和泉多摩川駅の看板。

久津輪が改札を出た広場に立っている。

里夏が改札の向こうから歩いてくる。

久津輪は手をあげる。

久津輪「こんにちは」

里夏「こんにちは」

久津輪「では、周辺案内をお願いします」

頭を下げる久津輪。

困った顔の里夏。

里夏「では、前に住んでいた住宅の多いところへ」

久津輪「はい！」

歩き始める里夏。

久津輪はその隣について歩く。

○住宅街

里夏がマンションを指差して、久津輪に話している。久津輪はメモ帳に手書きで書き込みながら、話を聞いている。

○商店街（夕）

里夏と久津輪が並んで歩いている。

久津輪「今日はありがとうございました」

里夏「いいえ」

久津輪「庄内さんの言った通り、交通もいいし、駅から少し離れるだけですごく静かだし」

里夏「そうですね。なつかしいです」

久津輪は里夏の横顔を見下ろす。

久津輪「あの！庄内さん。よかったらどこかで食事していきませんか？」

黙る里夏。

少し俯いて久津輪を見上げ、



里夏「……は」

吉木「あれ？柗司？」

久津輪の向かいから、吉木（22）と

淀見（23）が歩いてくる。

淀見「ほんだ、柗司だ。久しぶりじゃん！」

吉木「（ニヤニヤしながら）あれ、そちらの

方は……柗司のお母さん？」

里夏はびくつとして俯くと、ゆっくり

と肩が震え始める。

里夏「すみません、私はここで失礼します」

里夏は吉木と淀見の横を走っていく。

久津輪「え、庄内さん！」

吉木「あら、余計なこと言っちゃった？」

淀見「あ、そうだ柗司。

いまから、打ちっぱなしいかね？」

吉木「いいね、お母さんもどっか行っちゃっ

たし」

久津輪は拳を握りしめる。

久津輪「（小声で）恋人」

吉木「ん？」

久津輪 「（大声で）恋人だよ！」

久津輪は吉木と淀見の間を割って走って行く。

吉木と淀見は驚いた顔で走っていく久津輪の背中を見つめる。

○河川敷（夕）

河川敷の石畳にしゃがみこんで、お腹をさすっている里夏。

○住宅街（夕）

キョロキョロと辺りを見ながら走っている久津輪。

雨がポタポタと降り始める。

○カモシカ不動産池袋支店・廊下

巾着を持って歩いている里夏。  
後ろから久津輪が近づく。

久津輪 「庄内さん！」

里夏は振り返らない。

久津輪 「昨日はすみませんでした」

里夏は顔だけ久津輪の方に向け、会釈をして立ち去る。

久津輪はその背中をじっと見ている。

○同・パントリー・中

女子社員 ♫ と女子社員 ♪ が飲み物を持って立っている。

女子社員 ♫ 「聞いた？お局様、安達くんを連れ回したんだって」

女子社員 ♪ 「また、男たぶらかしてんの」

女子社員 ♫ 「支店に飛ばされといて、懲りないよね」

女子社員 ♪ 「そりゃ、旦那さんもないわ」

安達がパントリーに入ってきて、自動販売機で飲み物を選んでいる。

女子社員 ♫ 「あ、安達くん！おつかれさま」

女子社員 ♪ 「休憩？なんか飲み物買ってあげよつか？」

女子社員 ♫ 「私が買ってあげるよ！」

振り返って女子社員▶・♫を見る安達。

安達「いや、大丈夫っす。根も葉もない適当な軽口叩いてる甘ちゃんに、コーヒー奢ってもらっても、甘ったるくて吐き気がしちやうんで。じゃ、おつかれっす」

パントリーから出ていく安達。

女子社員▶・♫は顔を見合わせる。

○ファミリールストラン・中（夜）

久津輪が窓際のテーブル席に座っている。店内は閑散としている。

頬杖をつきなが、コーヒークップを片手に外を見ている久津輪。

ヒールを履いたかりん（24）が歩いてくる。

かりん「久津輪くん、久しぶり」

久津輪「かりんさん、ご無沙汰です」

席に座るかりん。

久津輪がメニューを渡し、かりんはそれを眺めている。

かりん「ごはん食べた？」

久津輪「うん。かりんさんは好きなもの食べて。今日はごちそうするんで」

かりん「じゃあ、ハンバーグステーキと、たっぷり苺パフェにする。あと、コーヒーも」

久津輪「セレブお子様セットみたいな注文」

かりん「はい！ピンポン押して」

久津輪が呼び鈴を押す。

店内にピンポンと鳴り響く。

かりん「で、相談っていうのは？」

久津輪「うん。いや、言いくいんだけど」

かりん「……恋愛相談？」

久津輪「（驚きながら）え！なんで」

かりん「あのねえ、元カノに言いくい話なんて、お金貸してほしいか、恋愛相談くらいよ。どっちにしてもろくな話なわけがない」

久津輪「さすがキャリアウーマンは違うね」  
かりん「関係なくない？てか、恋愛相談を別れた元カノに普通するかな？」

久津輪「相談できる友達いなくて」

真顔で里夏を見つめる久津輪。

かりん「……君、そういうところだぞ？」

久津輪「え、どういうところ？」

テーブルにハンバーグステーキが運ばれてくる。かりんは店員におじぎをする。

久津輪はカトラリーケースからフォークとナイフを取り出し、かりんに差し出す。

× × ×

食べ終わったパフェの器がテーブルに置かれている。

コーヒーを啜っているかりん。カップを置く。

かりん「なるほどね、その人に相手にされなくて困ってるってわけ」

久津輪「相手にされないっていうか、人と関わりたくないんだ」

かりん「んー。久津輪くんはさ、どうしてそ

の人のことが好きなの？」

久津輪は黙り込んで、覆い隠すように両手で顔を抑える。

久津輪「一度、彼女に救われたことがあって」  
かりん「死にかけたの？」

久津輪「まあ、ある意味死にかけてた。

かりんさんは知っていると思うけど、僕は友達がいない。人付き合いもまともにできない。それが自分の欠点だと思ってた。

でも、一人でいるのは辛いから、仲良くもない人に合わせて、笑ってないのに、

笑った顔をしてた」

かりん「私と付き合ってたときは、そんなことなかったけど」

久津輪「かりんさんと付き合う前に、変わるきっかけをくれた人が、その人だから」

かりん「その人が、いま君が恋をしている相手か」

久津輪はかりんの目を見つめ、ゆっくりとうなずく。

かりんは、手を上げて店員を呼ぶ

かりん「すみませーん！」

ファミレス店員「はい」

かりん「ビールください」

ファミレス店員「かしこまりました」

店員が空いている器を持って去る。

久津輪「コーヒー飲んだあとにお酒って」

かりん「喉渴いたの！ごめんごめん、続けて」

久津輪は不思議そうにかりんを見つめる。

久津輪「……なんてことない、一瞬だったん

だけど、その人は、ただ僕のように

すればいい、それは逃げではなくて、より

よい未来に向かう選択なんだって、言って

くれた。そんなのすごく当たり前なことな

のに、あの時の僕は気づきもしてなくて。

その言葉に、ハッとした」

かりん「……じゃあ、どうしてそのとき好き

だって言わなかったの？」

かりんは俯いて、スカートをギュッと



握る。ビールジョッキが運ばれてくる。

久津輪「そのときは好きだなんて思ってなかったんだ。ただ、救われ気持ちだから。

僕は僕らしく進もうと思えたあと、

かりんさんのことを好きになった」

かりんはゆつくりとスカートから手をほどき、大きく溜息をつく。

かりんは、ジョッキを持ち、ビールをぐいっと飲む。

久津輪「配属された支店に偶然その人がいた。でも、再会したその人は、どこか苦しそうな感じがした。たぶん気づかなかっただけで、初めて会ったときもそうだった」

かりん「で、いまその人に、少しはお近づきになれたと思ったら、何故かまた避けられはじめたと」

久津輪「うん」

かりんは持っていたジョッキをそっと置く。半分以上なくなっている。

かりん「久津輪くん。どうして私が君を好き

「なったかわかる？」

久津輪 「えつと……」

かりん 「やさしかったから」

久津輪 「うん」

かりん 「じゃあ、どうして君と別れたか、  
わかる？」

久津輪 「僕が」

かりん 「やさしかったからだよ」

久津輪 「え？」

かりん 「つまりね、私の問題だったってこと。

久津輪 くん「悪いところはなかった」

久津輪 「どういうこと？」

かりん 「無条件にくれるやさしさって、とき  
に毒になるんだよ」

久津輪 「毒の作り方勉強してない」

かりん 「……君、そういうとこだぞ？」

だからさ、やさしいことが痛いの。

自分はこのやさしさに応えられないんじゃない  
ないかって。怖いの」

久津輪 「僕は、そんなつもりでやさしくして

いるわけじゃないよ」

かりん「わかってる」

久津輪「好きだから、そうしたいんだ」

ビールを飲み干すかりん。

かりん「じゃあ、そろそろ行くね。明日も仕事だし」

かりん「まあ、がんばって！ごちそうさま」

席を立つかりん。少し進んで振り返る。

かりん「やさしさってさ、言葉にすればひとつだけど、人によって形はバラバラだと思う。その人にとって、本当のやさしさが届けば、自分の抱えている問題ごと大丈夫って、思えるんじゃないかな。毒をもって毒を制すって言葉もあるしね」

手を振って店を出ていくかりん。

久津輪はその姿をじっと見つめて、空になったビールジョッキを見る。

○同・外（夜）

かりんは左手で顔を覆い、目元を拭う。  
かりん「あーあ、期待しちゃって。バカみたいじゃん。ほんと、そういうところだったの」

○カレー屋・外

晴れ空に蝉の声。

久津輪と安達がスーツ姿で店から出てくる。手にはお弁当が入ったビニール袋を持っている。

安達「久津輪さあ、あの人のどこがいいわけ？」

○カモシカ不動産池袋支店・パントリー

2人の女子社員が向かい合っている。  
女子社員Aが女子社員Bの耳元に口を運ぶ。女子社員Aの口元。

女子社員A「（小声で）子供を殺したんだって」

女子社員Bが持っていた紙コップが落

ちる。床にコーヒーが飛び散る。

○同・屋上

里夏が地べたに座っている。  
側にある巾着は縛られたまま。

○同・階段

カレー屋のビニール袋も持ったまま、  
ドアを開ける手元。  
ドアが開く。

○同・屋上

ドアが開くと、ビニール袋を2つ持った久津輪がいる。里夏はそれに気づいて、久津輪を見る。

久津輪「庄内さん」

小さくおじぎをする里夏。

里夏「おつかれさまです」

久津輪「お昼、ご一緒しちゃダメですか？ 安達のヤツ、予約入ってるの忘れてたみたい

で。一人なんです」

両手に持ったビニール袋を軽く持ち上げて里夏に見せる久津輪。俯く里夏。

里夏「……ダメじゃ、ないですけど」

微笑んで里夏の隣に座る久津輪。

沈黙する2人。

久津輪「あの、庄内さん。僕……」

里夏は立ち上がってフェンスの方へ歩く。

里夏「久津輪さん、噂、聞いてないですか？」

フェンスを握る里夏。

久津輪は座ったまま、里夏の背中を見ている。

里夏「子供を殺したって」

久津輪「……聞いてないです」

里夏「そう……。私ね、君くらいの歳になる子供がいた。本当だったら」

久津輪「えっ」

地面に水滴が落ちる。

空は晴れているが小降りの雨が降る。

里夏「14のときにね、襲われたことがあつて……。それでできた子」

黙り込む久津輪。

里夏「不思議よね。最悪で最低な地獄みたいなことだったのに、私の子供なんだーって思ったら、おろせなくて。

私が産みたって言ったら、家族もおかしくなつて……。雨降ってきましたね。戻りましょうか」

久津輪「止む雨だから。聞かせてください」

里夏はフェンスに背中を預けて久津輪に向き合う。

里夏「泣かなかつたの。赤ちゃん」

○高校・屋上（回想）

晴れ空に蝉の声が響く。

フェンスにもたれている里夏（16）が、振り返ってフェンスを越える。

屋上の端に立つ。

里夏≡「それでもう、なんだかどうでもよく

なって。学校の屋上から飛ぼうしたの」

上靴を履いた足が少し前に動く。

里夏≡「でもね、屋上のへりに立ったら家庭  
科室で実習だったのかな、カレーの匂いが  
して」

里夏は校舎を見渡す

里夏≡「それで、私、お腹が鳴ったの」

お腹をさする里夏の手元。

里夏≡「空っぽになったのに。そしたら笑え  
てきちゃって。それで、笑えたことがすご  
く悲しくて。そのとき思った。

ああ、私はここで終わるけど、身体は生き  
るんだって。

そのあと、泣きながらお弁当を食べた」

巾着の上に空になったお弁当箱が置か  
れている。

(回想終わり)

○カモシカ不動産池袋支店・屋上

久津輪は里夏をじっと見つめる。



里夏も久津輪を見ている。

里夏「だから、君が好きになってくれるのは嬉しいけど、その人は、いないの。いない」

久津輪は近くのビニール袋を開け、  
ビニール袋からカレーを取り出す。

カレーを里夏の方へ差し出す久津輪。

久津輪「ここに、いるじゃないですか。」

ちゃんと、ここにいますよ」

立ち上がる久津輪。

久津輪「庄内さんがいないって言うなら、僕も存在しない。覚えてないかもしれないけど、あの日、僕に言葉をくれた庄内さんがいなかったら、僕は今この場にいません」  
手に持ったカレーを突き出す久津輪。

顔は雨で濡れている。

久津輪「でも、ここにいます。」

庄内さんが終わったと言った日には、お腹を鳴らして産まれた庄内さんが、ずっといるんですよ。だから……」

黙り込む2人。

里夏がゆっくりと久津輪に近づく。

里夏「（聞こえない小声で）ありがとう」

久津輪「え？」

里夏「……そのカレー、ひとつ頂けますか？」

久津輪のカレーを持っている手を掴み、

雨で濡れた顔で、微笑む里夏。

雨が止む。

○マンション・里夏の部屋・玄関・中（夜）

電気の点いていない玄関。

里夏がスマホで電話をかけている。

里夏の母「はい、庄内です」

背筋が一瞬伸びる里夏。

里夏「……」

里夏の母「もしもし？どちら様でしょうか」

里夏「……あ、あの……」

里夏の母「……里夏？」

里夏「……う、うん。あの」

里夏の母「元気にしてるん？」

泣き崩れる里夏。

里夏「（震えた声で）お母さん。迷惑かけて、ごめんなあ」

里夏は自分の肩を、自分の腕でぎゅつと抱きしめる。

○カモシカ不動産池袋支店・外観

桜が舞っている。

○表参道・青山交差点

スマホを持っている手。

LINEの画面に久津輪柊司と表示されている。安達はメッセージを打ち込む。

安達「いまからデートなんだ。緊張してる。どうしよう」

既読が付いて久津輪から返事が来る。

久津輪「安達は、カッコいいよ」。

安達「（微笑んで）なんだよそれ」

女性がやって来る。

安達（27）は右手を挙げる。

安達「局さん！」

安達に気づいた恭子（44）は、少し  
早足で安達に近づく。

恭子「私、人を待たせない主義なんですけ

ど？安達、何分前に来たわけ？」

時計を見る安達。11時40分。

安達「（苦笑して）ちょうど今ですよ。いき  
ましよう。お店、歩いてすぐのところす

恭子「ちゃんと入れるんでしょうね？」

安達「大丈夫ですよ！」

○イタリアバル・外

行列ができている。

店から出てくる安達。

安達「ただいま満席でして、1時間ほどかか  
るか。えへへ……」

恭子「えへへ、じゃないわよ！安達！なんで  
あなたは、できる感じ出しといて失敗する  
のよ！」

俯く安達。

恭子「……はあ。近くによくランチするフレ

ンチレストランがあるから、付いてきなさい」

顔を上げて、嬉しそうに恭子を見る安達。

安達「はい！一生付いていきます！」

歩き出した恭子の隣に駆けていく安達。

恭子に肘で小突かれる。

恭子「若いのに腕のいいコックがいるのよ。」

関西弁でキャラがちよつとキツイ子だけど」

2人の横を通るかりん（28）。

かりんは、左手でスマホを持ち電話をしている。

左手の薬指のリングが光る。

かりん「もしもし、うん。いま仕事終わって向かってるところ。その式場素敵でしょ？」

○同・女子トイレ・中

女子社員△と女子社員□がメイクを直している。

女子社員△「どうあの男たち？」

女子社員 ㊦ 「微妙かも」

女子社員 ㊧ 「だよね。けど、育てれば光るかも」

女子社員 ㊨ 「いちおう、大企業勤めだしね」

2人同時に口紅を引く

○同・テーブル席

吉木（26）と淀見（27）が隣り合  
って座り、談笑している。

向かいの空席には、女物のバッグが2  
つ置いてある。

○久津輪の家・リビング

テーブルにランチョンマットが3つ並  
んでいる。1つは子供用である。

それぞれにカレーが置かれていく。

久津輪みく（2）が、里夏（40）の  
エプロンを引っ張る。

みく「ポンポンすいた！」

里夏「はいはい。もうすぐできるから、お父

さん呼んできて」

○久津輪の家・久津輪の部屋・中

スマホの画面に安達雅人と表示されている。安達「いまからデートなんだ。緊張してる。どうしよう」。

久津輪（26）が苦笑する。

久津輪「3年前の方が大人ぽかったな」

メッセージを入力していると、

みく「おとと」

久津輪「はーい！」

スマホを机に置いて、声がした方へ向かう久津輪。

○同・リビング

テーブルの近くにある子供用のイスにみくが座っている。久津輪もテーブルにつく。里夏がエプロンを置いて、座る。

久津輪「みく、いただきますは？」

みく「いただき……」

里夏のお腹が鳴る。

少し間が空いて久津輪が笑う。

里夏も恥ずかしそうに笑う。

みくも2人を見て、笑う。

カレーから湯気が立っている。

タイトル「産声が鳴る」

おわり